

## 三浦市立上宮田小学校

研究テーマ：自他のよさに気づき、考え、行動できる子を育む

### 1、実践の目的

本校の教育目標は、「自立・貢献」である。この教育目標には、子どもたちには、たくましく生きぬく「自立」の力と、他者や社会に「貢献」する心と力をもってほしいという願いをこめている。

この教育目標の具現化に向けて、目指す児童像として

- ・自分を好きになり、自分を高める子
- ・ほかの人を好きになり、ほかの人を大切に  
する子

を掲げている。しかし、実態としては、児童の自己肯定感が低いことや人と適切な関わり方ができないこと等の課題があり、そのことに起因すると思われる児童指導上の問題も多い。そこで、特別な教科道徳の学習を中心に、自分と他の人を大切にする心を育むため、「親切、思いやり」「感謝」「礼儀」「友情、信頼」など、主として「人との関わり」に関する授業実践に取り組むこととした。また、テーマに沿った授業づくりの手段として、思考ツールを活用することとした。

### 2、実践の内容

#### (1) 校内研究の組織体制

研究推進委員会を中心に、グループを結成、研究を進めた。これまでは、低・中・高学年の3つのグループに分かれて指導案検討や代表者授業を行っていたが、学級数が減少し、3学年が単級となったため、今年度は、上・下学年の2グループとした。

具体的には、次のように取り組んだ。

- ・全教員が、1回ずつ研究授業を実施。
- ・上・下学年の代表者による研究授業、協議会の実施。

指導案検討は各グループで実施した。全学級の研究授業を全教員が参観することは難しいが、少しの時間でも、できる限り参観することとした。また、代表授業は、全教員で模擬授業形式の指導案検討を行い、授業後は協議会を開いて、振り返りをした。

上 学 年	6年「みんな、おかしいよ！」 (内容項目：B 相互理解、寛容) 光村図書 道徳⑥
下 学 年	3年「水やり係」 (内容項目：B 相互理解、寛容) 光村図書 道徳③

#### (2) 講師を招いての研修

外部講師として、昨年度に引き続き、千葉大学教育学部附属教員養成開発センターの土田雄一教授を2回招聘した。

1回目は、「主体的・対話的に自己の生き方についての考えを深める道徳授業について一思考ツール・ICTの活用を通して」という演題で、講演を行っていただいた。講演や模擬授業を通して、授業改善のポイントや思考ツールの効果的な活用方法について学ぶことができた。

2回目は、下学年代表授業を参観していただき、協議会で授業についてのご助言や自己肯定感の向上や他者理解につながるアクティビティの紹介などをしていただいた。

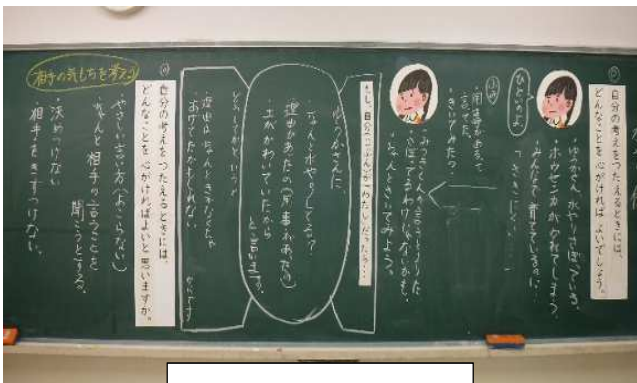
### 3、実践の成果

#### (1) 校内研究について

研究テーマは、本校児童の課題でもあったので、思いやりや相互理解・寛容など、人との関わりに焦点を当てて研究を行ったことはよかった。道徳科の授業を中心に、すべての教育活動のなかで、自分や他の人を尊重できるような活動を全教員が意識することができた。授業だけでなく、一人ひとりが安心して居場所のある学級、学校をつくっていきけるようにすることが重要であることを改めて実感した。

#### (2) 思考ツールについて

授業に思考ツールを取り入れた1年目として、全員が思考ツールを活用した授業実践を行ったので、教員全員で共通理解をしたり学んだりする機会となった。実際に、授業で思考ツールを取り入れたことは、考えたり、話し合ったりする際の手立てとして有効であった。通常の授業では書くことに抵抗感がある児童でも、意欲的に取り組むことができたことも成果の一つであった。また、ワークシートに記載した思考ツールをそのまま板書することで、児童の意見や思考の流れが整理され、意見交流の際に活用できた。留意点として思考ツールありきではなく、ねらいに迫るために手段として活用することを共通理解した。今後は他教科でも取り入れ、有効に活用していきたい。



3年「水やり係」の板書

### 4、今後の展開

#### (1) 今後の研究の方向性

全員が同じ方向性で研究を進めていけるよう、来年度も、全教員が1回ずつの研究授業を行う予定である。また代表者による授業も実施し、指導案検討や協議会を全教員で行い、授業力の向上に努める機会とする。今年度、思考ツールを活用した授業実践を行い、有用性を実感した。しかし、授業のねらいに合わせた思考ツールの選び方や使い方など課題は残っているので、来年度も継続して取り入れ、思考ツールについての研修を受けたり、実践を重ねたりしたいと考える。

#### (2) 次年度の課題

今年度は、思考ツールを活用し、児童一人ひとりが自分の考えをもつための授業を行うことが校内研究の中心となり、授業の内容と研究テーマとの関連が見えにくかった部分がある。テーマに迫るために、課題に対する手立てを講じて、指導案に明記する必要があったと考える。また、指導案検討や協議会の中でも研究テーマに対する手立てについて教員全員で話し合う機会を作っていくことが重要だと考える。

また、研究授業に関しては、授業を見合う体制を作りきれず、個人の研究になってしまいうこともあった。少なくともブロック内で研究授業を見合う体制を整え、授業後は授業者と参観者で振り返りを行いたいと考える。小規模化している中で、学校として研究組織体制の検討をしていきたい。